

不埒な彼と、
蜜月を

1 処女喪失のために選んだ男

「大丈夫だよ、花純ちゃん。そんなに緊張しなくても」

つい今しがた、わたしの身体を覆っていたものを手際よく取り払ったばかりの男が、艶っぽい笑みを浮かべながら見下ろしてくる。

二十九歳のいままで処女を守ってきたけれど、とうとうわたしにもそのときがやってきた。だけど、相手は好きな人でもなんでもない。そう思えば思うほど、身体は強張っていく。

やっぱりやめておけばよかった。

と後悔し始めたのが顔に出ていたのか、男はわたしの肩をそっと撫でた。それだけでもう、びくりと甘い痺れが襲ってきて、わたしの身体は震えてしまう。

「いまさら、逃がさないよ?」

そう言っつて、社内でも有名な遊び人である彼——成宮未希は、整った顔に酷薄な笑みを浮かべた。

事の起こりは、一時間ほど前にさかのぼる。

わたし——笠間花純が勤めているのは、『ミライデザイン』というデザイン会社。アットホーム

なことを売りにするくらい小さな会社ではあるが、業界では評判がよくてわりと有名だ。

デザイン会社という性質上、残業は多いが、基本的な勤務時間は午前九時から午後六時まで。きちんと納期までに自分の仕事を仕上げれば、土日祝日は普通に休むことができるし、有給休暇も取らせてくれる。その点は恵まれていると思う。

この日は珍しく、午後九時にわたしと課長を残してみんな帰ってしまった。というか、わたしは誰もいなくなるまで待っていようと思って、わざと残業していたのだけれど。もう少し遅い時間になると思っていたから、少しほっとした。

わたしはすぐそこにいる課長——昨年、企画営業課の課長に昇進した成宮さんの、直属の部下だ。絵が好きでこの道に進んだはいいものの、なぜか信じられないくらい絵が下手なせいで、事務ばかりやらされている。

具体的に説明すると、わたしがしているのは営業事務。いわゆる『営業活動のフォロー』だ。社の前線に立つ営業が滞りなくお客様と打ち合わせができるよう、様々な手配をするのだ。その他にも総務や経理の手伝いといった、いわゆる雑用などもしている。それでも、自分の好きな分野に多少なりとも携わっている、ということと現状に不満はない。

成宮さんは課長になるまでは当然自分で営業をしていて、その営業力ときたら見事なものだった。だけど彼も絵は苦手なのだろうか、彼の描いたデザインを、社員の誰も見たことがない。もっぱら、営業以外は事務と雑用をしていた。

そして現在、課長となった成宮さんは、基本的に部下であるわたしの書類をチェックしなければ帰宅することはできない。わたしは、フロアに成宮さんとふたりきりになったのを改めて確認して、声をかけた。「成宮さん、書類できました」「見せて」

課長といっても、本人がそういった役職名で呼ばれるのを好まないこともあり、社内ではこれまですり「成宮さん」で通っている。

その成宮さんはどうに自分の仕事は終えていたのだろう、パソコンの電源を既に落としていて、傍らに積み上げられた書類をファイルにまとめているところだった。

ファイルをデスクの上に置いて書類を受け取り、目を通す成宮さん。

社内でも遊び人と名高い彼だけれど、仕事はきっちりこなすしミスもしない。仕事中的こういう真面目な表情だけ見れば、遊び人だなんて思えないんだけどなあ……と思う。

サラサラの黒髪に、二重の大きな目、漆黒の瞳。どちらかといえば女性的な、繊細な面立ち。それらを見つめていると、うっかり惹きこまれそうになってしまう。

三十五歳だと聞いているけれど、とてもそうは見えない。顔にしわもないし、白めの肌はすべすべで、下手したらわたしよりも若い肌をしてるんじゃないかと思う。

わたしの背があまり高くないこともあるのだろうけれど、それでもわたしより頭ひとつぶん大きいし、足も長い。スタイルだって満点だ。街を歩いていたら振り向かずにはいられない、男の気というものもある。

当然、そんな成宮さんにつき合いたい、と言う女性たちはたくさんいる。その上浮いた噂も多く、本命が誰なのかもわからない。わたし自身、彼が社員や出入りの業者の女性と仲睦まじく話したり、休憩スペースで肩を寄せ合ったりしている場面を何度も見ている。聞くところによれば、寄つてきた女性はみんな彼の餌食になるのだとか。本当のことはわからないけれど。

「うん、問題ない。あがつていいよ」

そう言つて、自分も帰り支度を始める成宮さん。

「あの、成宮さん」

「ん？ なに？ あ、なんだつたらもうこんな時間だし、送つていこうか？」

「いえ、あの……お願いしたいことが、あるんですけど」

そう切り出すと、彼はいささか面倒くさそうな顔をした。

「あー、悪いけど明日にしてくれないかな。もう遅い時間だし、俺持ち帰りの仕事もあるし」

「ええと、そんなに時間はかからない……と、思うんですけど……いえ、かけなくてもいいんですけど……」

「なに？ どんなこと？」

持ち帰りの仕事があるのなら、こんなことをお願いするのは迷惑かもしれない。だけど、わたしも切羽詰まつている。その“お願いしたいこと”が理由でこんな時間まで待っていたのだ。

それにしてもいざとなると緊張の度合いがハンパない。いくら成宮さんが遊び人とはいえ、引かれてしまうだろうか。

一瞬、躊躇したけれど、意を決してわたしは彼に向かって頭を下げた。

「わたしの処女、もらつてくださいっ！」

反応があるまで、少し間があった。

さすがの彼も、この申し出には多少なりとも驚いたらしい。

「……笠間さんって、真面目な女の子だと思つてただけど」

くすくすと笑う声に恐る恐る頭を上げると、成宮さんは楽しそうに肩を揺らしていた。

そしてふつと真顔になつて、わたしをじつと見つめてくる。

「うーん……なんか、ワケあり？」

心の奥底まで読み取ろうとするようなまっすぐな眼差しに、怯みそうになる。遊び人でも遊び人なりに、わたしのことを気遣つているのだろうか。彼ならわたしのこんなお願いも軽く受け止めてくれると考えていたから、そんな質問をされるなんて少し意外だった。

「……まあ、ワケあり、ではあるんですけど……」

素直にそう答えると、幸い成宮さんはそれ以上追及しようとはせず、すぐにいつものようにきれないな、そしてどこか悪戯っぽい微笑みを見せた。

「俺でいいなら、喜んで笠間さんの処女、もらうけど」

そう言つてもらえて、わたしはいくぶん肩の力を抜いた。こんなお願いをして断られでもしたら、

わたしは相当にイタイ女だ。

「そう言っていただけで、よかったです。処女は面倒くさいって言う男の人もいるって聞いているので」

「うん、まあそういう男もいるよ。俺は相手が処女なら、処女なりに楽しませてもらうけどね」

そこで、ねえ、と成宮さんはわたしの顔を覗き込む。男性に整った顔を近づけられると反射的に胸がドキドキしてしまうのは、女として仕方がないことだと思っ

「そんなこと言うってことは、笠間さん、俺のこと好きなの？」

「それは……違います」

否定すると、彼は「ふうん」と言っただけであっさり体勢を戻す。

ここで彼のことが好きだと誤解されたら、今後もずっと身体を求められるかもしれない。わたしが望んでいるのは、あくまでも一度きりの関係だ。男の人とつき合っただけなら、真剣につき合ってくれる人のほうがいい。成宮さんみたいな遊び人ではそれは叶わないだろう。

「てことは、俺はほんとに笠間さんの処女をもらうだけ？」

その言葉に、少し残念そうな響きを感じたのは気のせいだろうか。

いや、きつと気のせいだ。女の子ならよりどりみどりの成宮さんが、わたしなんか執着するはずがない。そう気を取り直し、顎を引いてうなずく。

「はい。処女をもらっていたあなたも、誰かにそのことを言ったりしません」

というか、成宮さんのほうこそ、こんなこと誰にも話してほしくないのだけれど。

そんなわたしの意図を汲み取ったのか、成宮さんは少し考え込んでから、

「わかった」

と、返事をした。そしてその大きな手で、わたしの手をきゅつと握ってくる。

「じゃ、俺の家に行こうか」

「えっ……いい、いまから、するんですか？」

「善は急げ、でしょ？ 俺、せつかく目の前にうまそうなご馳走があるのに、先延ばしにするなんて嫌なんだよね」

なにが「善」でなにが「ご馳走」なのかわからないままに、わたしは成宮さんの車の助手席に乗せられて、彼のマンションに招待された。

季節は、お盆休みに入る直前。

なぜわたしが突然処女を捨てることを決意したのか——それは二日後の土曜日に、お見合いをすることが決まったからだ。それも、そのまま結婚させられること決定のお見合いが。

いい歳をして恋人のひとりもないわたしに痺れを切らした母親が、知り合いに頼んで「絶対にわたしをもらってくれる」と約束した上でセッティングしてきたらしい。

断ればよかったのだけれど、なんでもそのお見合い相手の身内がかなりの大物で、断ると父親の仕事にも影響するのだと母親から言い含められてしまった。

いままでも何度かお見合い話を持ち込まれたことはある。でも、ここまで強引な手に出られたの

は初めてだ。今回はお母さんがよっぽどお相手のことを気に入ったのか、それとも少しでも早く孫の顔が見たくなったのか……恐らくそのどちらもだとは思うけれど。

お母さんは昔から強引、というか身勝手な人で、わたしはそんなお母さんに逆らえたことがない。それはもう小さなころから根付いている習性のようなものだから、今回も、ああとうとうこのときが来たか、というあきらめの境地だった。

だけどやっぱり好きでもないのに結婚するだなんて、重苦しい気持ちにしかならず。

わたしは相手の写真を見せずに、ただ、こんなふうに好きでもない人に処女を捧げるのは嫌だな……と考えていた。それぐらいなら、遊び人でセックスがうまいと社内で噂されている成宮さんにあげてしまったほうが、いい思い出になるんじゃないか、とも。

女にとって、処女というのはとても大切なものだと思う。だけどこのままでは、わたしは見も知らぬお見合い相手にそれを捧げるようになってしまふ。おまけに、その人がうまいか下手かもわからない。

わたしは別に成宮さんのことを好きでも嫌いでもないけれど、同じ好きでもない人ならセックスがうまい人のほうが断然いい。だって、ただ痛いだけの初体験なんて、相手との間に恋愛感情がない分、むなしなものだと思うし。

それにもうひとつ。二十九歳なのにまだ処女だなんて、お見合い相手にどう思われるだろうか、というのも心配だった。

わたしは、世の男性が処女というものにどういうイメージを持っているかは知らない。けれど、

この歳になってもまだ処女ということは、それだけでもう女性として劣^せっていると見られるだろうと思った。お見合い相手にわたしが処女だと知られたら、結婚もだめになってしまうかもしれない。わたしは別にそれでもいいのだけれど、そうなったら父の仕事にどんな影響が出るかわからない。もしそのまま結婚したとしても、これからずっと歳を取るまで一緒にいなければならぬ相手に、劣っていると思われることはたまらなく嫌だった。

その点、成宮さんだったら女性経験も豊富そうだし、一度きりの関係で責任を取らなくてもいいということであれば、わたしが処女であることにはなんの問題もないはずだ。むしろ他の人より寛容に対処してくれそうだ。

だからタイミングを見計らって、成宮さんに声をかけたというわけだ。

成宮さんは真剣な交際を望むわたしにとって好ましい相手ではないし、それ以前に彼に“真剣な交際”なんていう概念があるかどうかもあやしい。もしも成宮さんと結婚しろと言われたら、即座に嫌だと答えるだろう。

けれど不実な彼は、処女喪失の、一度きりの相手としては最適だと思った。

成宮さんの部屋は、会社にも駅にもほど近いところにある新築マンションの十階にあった。

玄関を入ったら真正面に広いリビングがあり、目に飛び込んできた大きな窓の夜景に思わず目を奪われてしまふ。

そのリビングを通り、奥にある廊下の電気をつけてくれた成宮さんは、廊下の両端にある扉のう

ちの片方を開けた。

「ここが俺の寝室だよ」

入って、と優しくうながされる。廊下から漏れてくる明かりに照らされ、きれいに片づけられた寝室が見えた。大きな藍色のベッドや大容量のクローゼットのあるその部屋は、どう見ても小さなデザイン会社の課長がひとり暮らししているものとは思えない。

「ずいぶん……大きなお宅ですね」

ぼつんと感想を漏らすと、成宮さんは、
「まあ、いろんな事情があつて、最近ここに引っ越してきたんだよ。ここは利便性も高いし永住するのにいいつてすすめられてね」

と説明してくれる。だけどわたしはその意味をはかりかねた。

三十五歳ともなれば永住型の広めのマンションを購入してもおかしくはないと思う。けれど、それは結婚相手のいる場合じゃないだろうか。遊び人の成宮さんとはかけ離れた話のように思える。いや、成宮さんのことだから、結婚云々は関係なく、狭い部屋では女性を連れ込むのに都合が悪いというだけの話なのかもしれない。そう考えると、それが一番可能性が高い気がした。

そのとたん、これからここで成宮さんに抱かれるんだ、と思い至り、一気に緊張が背筋を走り抜ける。

成宮さんって、社内でもセックスをすることがあるって聞いたけれど本当かな。

ぼんやりとそんなことを考えていると、スーツの上着を脱いだ成宮さんに引き寄せられ、耳たぶ

を甘噛みされた。

「ひゃっ！」

「なに、考えてんの？」

「い、いえ別に……」

「そういえば、処女はもううって決まったけど、キスは？　してもいいの？」

キス……か。そういえば処女は捨てると覚悟していたけれど、そんなに細かいことまでは決めていなかった。

「……してもしなくても、どっちでもいいです」

「そう？　キスって案外大事なものなんだけどなあ。すれば気分も盛り上がるし、気持ちいいものだし」

「そ、そうなんですか？」

「うん。キスだけで濡れちゃう子もいるしね」

そこまで言っつて、ふと成宮さんは小首をかしげた。

「笠間さんは、キスの経験もないの？」

「う……、はい」

「うわ、いまだき貴重だね。ファーストキスまで俺がもらっちゃってもいいの？」

いささか抵抗があるのは確かだけれど、どうせ好きでもない相手とファーストキスをするんだつたら、いま、少しでも面識のある成宮さんとしたほうが何倍もいい。

「……かまいません」

そう答えたところで、わたしは気がついた。

「あの、……こんなことを頼んでおいていまさらなんですけど、……成宮さんって、つき合っている人はいないんですか？」

「ああ、いまはいないよ」

さらりと答える彼。けれどセフレなら何人かいるんだろうな、とぼんやり思う。

「またよけいなこと考えてるね」

「あ、……」

「花純ちゃんは、すぐに顔に出るからわかりやすいよ」

いきなり下の名前で呼ばれて、心臓がドクンと跳ねる。歳の近い男の人に下の名前で呼ばれるなんて、それこそ幼稚園のとき以来で。いや、幼稚園児は「男の人」ではないか。ノーカウントだ。

そんなことを少し混乱した頭で考えていると、ふっと顔に影が落ちた。はっと我に返ると、成宮さんの顔がそこにあつて、わたしの顎あごに手をかけてくる。

「目、閉じて」

「……っ」

ぎゅっと固く目を閉じると、ふわりと唇にやわらかくて熱いものが触れた。

その瞬間、どこかバナラに似た香りがして……触れているだけなのに、唇が押し当てられているだけなのに、意識がふわふわとってしまう。

ただ触れるだけのキスがこんなにも気持ちのいいものだなんて、知らなかった。それはやっぱり、相手が百戦錬磨ひゃくせんれんまの成宮さんだからなんだろうか。

やがて唇が離れると、わたしはつい思ったことをぼろりと口にしてしまった。

「……男の人の唇って、やわらかいんですね」

成宮さんは、くすりと笑う。

「もつと硬いと思った？」

「はい。それに、想像していたのと全然違って……甘い、です」

その瞬間、成宮さんの瞳がなんだか切なげに揺れた。

「そんなに可愛いこと言われたら、めっちゃくちゃにしたいくなるんだけど？」

「……ん……っ！」

言うが早いか成宮さんは、わたしの両頬を手で挟み込んで、深いキスをしてきた。慌てて唇を閉じようとしても、もう遅くて……成宮さんの熱い舌が入り込んできて、思う存分口内くちうちを蹂躪しゅうりゃんされてしまう。

唇を離さないまま幾度も角度を変えられ、最後には舌を吸われて、自分のものではないような甘い吐息が漏れる。それがたまらなく恥ずかしくて、ついうつぶいでしまった。

「……キスも、もつと……気持ち悪いものかと思ってました」

その言葉にも、成宮さんは引いたりしない。

「あうしてっ」

「小学生のとき、よくわたしに意地悪してた同級生の男の子に、マスク越しにキスされたことがあるんです」

わたしは甘く優しい口調に導かれるように、自分のトラウマについて口にしていった。

あのとときのことは、いまでも忘れられない。

あのとときわたしは、風邪を引いてマスクをしていた。休み時間にいつもどおり教室の自分の席で絵を描いていたら、とんとん、と後ろから肩を叩かれて。振り向いた瞬間を狙って、そこにいた男の子にキスをされたのだ。

マスク越しでも本当に気持ちが悪かった。やわらかいか硬いかなんて判断もつかないほどショックで。もともと引つ込み思案な性格の上に、そのときのトラウマも災いして、以来男の人が苦手になってしまったのだ。時間が経つにつれ、あのとときの嫌悪感も薄れていったけれど、いまだに男の人の前ではどう振る舞っていいかわからない。特に好きな人に対しては、まともな話することもできなくなる。

「……もしかしたらあれがわたしのファーストキスになるのかもしれないですけど……認めたくなくて」

当時の同級生以外は知らない事実。その後できた友達にも誰にも、言ったことがなかった。成宮さんは一度きりの相手だからこそ、こうして言うことができたのだろう。

つと、成宮さんの指が伸びてきて、わたしの唇に優しく押し当てられる。まるで、それ以上はいとでも言うかのように。

そろそろと目線を上げると、わたしを見下ろす優しい漆黒の瞳があった。

「その男の子、花純ちゃんのことが好きだったんだね。でもそんなもの、本当のキスじゃない。きみのファーストキスの相手は間違いない、この俺だよ」

そう言われたとたん、心がふわりと軽くなったような気がした。成宮さんのことは好きではないけれど、その言葉にわたしのトラウマを消し去ろうとする優しさを感じて、うれしくなる。

思わずなにかを言おうとした唇に、また成宮さんの唇が触れる。まるでわたしの唇の形を確かめるかのように幾度も啄んだかと思うと、下唇を軽く食まれる。その状態のまま下唇を舐められて、快感に頭の芯がぼんやりしてきた。

舐めて吸って、甘い吐息を漏らしたわたしの唇の隙間に再び舌が忍び込んでくる。成宮さんの甘い舌に頬の内側や歯列を丁寧な舐められるたびに、指先まで痺れてしまう。恥ずかしくて思わず逃げようとすると、彼の舌はまた追いかけてきてわたしの舌を絡め取ってしまう。

「ん……っ！」

そのとたん、いままでより強い快感が押し寄せてきて、いつそう大きな声が漏れてしまった。成宮さんはふっと笑い、わたしの両頬を優しく両手で包み込む。

「舌先、弱いんだね」

「わ、からな……」

「舌、出して」

甘いささやきに、さらに恥ずかしさを覚える一方で、同時に興奮もしていた。

「少しでもいいから」

きつとわたしの顔は、これ以上ないくらいに赤くなっていることだろう。

そんなことを思いながらほんの少しだけ、そろそろと舌を出してみる。成宮さんは満足そうに微笑むと、それを自分の舌でなぞるように舐めてきた。

「あ……っ！」

びりっとした甘い痺れにびっくりして舌をひっこめると、「こちら」と宥めるように頬を撫でられる。

「ひっこめちゃだめだよ。もう一度、出して」

「で、でも」

「いっぱい気持ちよくしてあげるから、……ほら」

初めては気持ちいいほうがいい。その初めての相手に成宮さんを選んだのは、わたしだ。

恥ずかしさは頂点に達していたけれど、わたしはまたそつと舌を出した。待ち構えていたように成宮さんの舌が再びわたしの舌先をなぞる。

「あ……は……っ」

こらえても甘い息が漏れてしまうほど、その舌同士のキスは気持ち良かった。ちろちろと舌先を舐められ、なぞられているだけなのに、身体の芯が疼いてくるのがわかる。下腹部の奥のほうからなにかがあふれてくる感じもしてきて、羞恥のあまり成宮さんのシャツの胸のあたりをつかんでしまった。

成宮さんは吐息だけでふつと笑うと、舌先だけのキスをしながら、ゆっくりとわたしをベッドに押し倒す。ベッドは思いの外やわらかく、ふわりとわたしの身体を受け止めてくれた。

さらに成宮さんは器用に、わたしのスーツやその下のシャツ、下着までも取り去ってしまう。寝室の電気は消えたままだったけれど、開けっ放しの扉から射し込む廊下の明かりは、わたしの身体を彼の瞳に晒すには充分だった。

その熱い視線に、ふと我に返ったわたしが慌てて身体を隠そうとしても、成宮さんは片手でわたしの両手首をまとも上げ、頭の上に固定してしまう。

「大丈夫だよ、花純ちゃん。そんなに緊張しなくても」

そう言っただけを見下ろす成宮さんの瞳は、とても情熱的で……ドクン、とまた心臓が飛び跳ねる。その形のいい唇は酷薄な笑みをたたえているというのに、漆黒の瞳は不思議なくらいに真剣で、いつも成宮さんは、こんなに真剣な瞳をして女の人を抱くんだろうか。そんなに真摯な心を持った人とは思えないのに。

緊張でガチガチに固くなったわたしの肩に、成宮さんの大きな手が触れる。わたしは思わず身体をびくりと震わせた。

「いまさら、逃がさないよ？」

そう告げた成宮さんの声は、どこか甘美な響きを伴っていた。

——わたし、やばい男にとんでもないことを頼んでしまったのかもかもしれない。

そんな考えが脳裏をよぎったときには、成宮さんの片手がわたしのささやかな胸のふくらみに移

動するところだった。

「あ……っ！」

最初は、形を確かめるように優しく、ゆつくりと。けれど、次第に強弱をつけて、円を描くように揉みだかれる。そうしながら首筋に舌を這わされて、さらに甘い声を上げてしまった。

「もう乳首、立ってんね」

「や……っ！」

そんな恥ずかしいこと、どうして口にするんだろう。

涙目になって睨みつけると、成宮さんはそれすらも可笑しいと言いたげに口角を上げる。

「強気なのに震えてるって、めちゃくちゃ煽られるんだけど。わかってやってんの？」

「ちが、……あ、っ！」

長い指で乳首の周囲を撫でさすられる。器用に中心をよけて、幾度も幾度もそうされているうちに、先端は自分でもわかるほどに硬く張りつめて、ぷっくりと膨れ上がってくる。まだ触れられないのに、そこは既にじんじんと熱を持っていた。

彼のもう片方の手はというと、ベッドに肘をついた状態でわたしの頭を優しく撫でている。

成宮さんって、ほんとにこういうこと、慣れてるんだ。余裕たつぷりに見える成宮さんに、また心臓がドキドキしてしまう。

「花純ちゃんって、感じやすいんだね」

心底うれしそうなその声に、羞恥でふんふんと首を横に振る。

「そう？ だつてここ、まだ触ってないのにこんなに腫れてるよ？」

「あ、や……っ！」

ふつと乳首に吐息をかけられると、それだけでびりつと電流のような痺れがつま先まで走る。

「や、もう……っ！」

「もう、なに？」

イジワルクささやくその甘い声が、掠れてこれ以上ないくらいに色っぽく聞こえる。その間も成宮さんの指先は、わたしの乳首の周りだけを丹念に、くすぐるように撫でている。

「どこか、触ってほしいところもあるの？」

「っ……っ！」

絶対にわかっていての台詞だろう。事実、そのきれいな顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。「言ってくれないと、わからないなあ」

そう言いながら彼は、ほとんど力が抜けてしまっていたわたしの足の間に自分の足を割り込ませた。

「あ……っ！」

秘所に成宮さんの太ももが当たって、くちゆりと水音がした。やだ、わたし……もう、こんなに濡れていたんだ。

その音は成宮さんの耳にも聞こえていたみたいで、彼は笑みを深くする。天使のようにきれいな顔に浮かぶ、イジワルで容赦のないその微笑みにすら興奮してしまい、背筋がぞくりと粟立つ。

「焦らされて、もうこんなにしちゃったんだ」

「ち、が……っ……あうっ！」

そのまま太ももを濡れた秘所に擦りつけられ、初めての刺激に身体が海老反りになる。思わず成宮さんの肩をつかんだけれど、彼はその行為をやめてはくれなかった。

擦りつけられるたびにそこから発した熱が全身に回り、お腹の奥のほうで熱く疼いてくる。水音もくちゅくちゅと激しくなっていく。

「なにが違うの？」

笑みを浮かべたまま、成宮さんが耳元でささやく。

「ちが……う……っ」

「だから、なにが？」

「……っ……」

そんな恥ずかしいこと、言えるわけがない。感じてないというひと言すら、男性に免疫のないわたしにはハードルが高すぎた。絶対に言うまい、と下唇をきゅつと噛むと、成宮さんは指と太ももをゆるゆると動かしながら、くすつと笑う。

「花純ちゃんは、初めてなんだもんね。イジワルは、これくらいで許してあげる」

言うが早いか、成宮さんの指がわたしの胸の先端をきゅつとつまみ上げる。

「ひあっ！」

我知らず待ち望んでいた刺激に、ひときわ大きな声が上がってしまった。

「可愛い……」

成宮さんがそう言いながら、つまんだ乳首をこりこりと左右に動かす。そうしながら、もう片方の胸の先端を前触れもなしにぼくりと口に含んだ。

「あ……いやっ、……いや……っ」

そのとたんわたしの口からますます甘い声上がる。

身をよじろうとしても、両方の胸から伝わる快感に腰が抜けてしまっていて、うまくいかない。

成宮さんは指も太ももの動きも休めずに、わたしの乳首を唇に挟んで引張り、かと思うとまた口に含んでそのまま舌でころころと転がす。

「だめ……成宮さん、……っ……いや……っ」

「そう？ 身体のほうは全然嫌がつてないみたいだけど。特にこことか……ほら」

「あ——っ！」

太ももの動きがやんだかと思うと、するりと滑り込むように成宮さんの手が秘所に移動する。そして割れ目を指の腹で軽く押された。くちゅりと淫猥な音が響いてきて、もう恥ずかしくてどうしようもない。

再び上へと戻ってきた長い指で乳首を撫でさすられ、つままれては捏ねまわされる。その間、自分の濡れたものがじわじわとお尻のほうまで伝っていくのがわかる。それぐらい、わたしは感じてしまっていた。

だけど成宮さんは、今度はお腹から上ばかりを唇と舌、指を使って執拗に攻め立て、下の肝心な部分にはなかなか触れてこない。

おへその周りを舌で触れられただけで、あり得ないくらいに甘い痺れが背筋を駆け抜ける。そんなところが感じるだなんて、思ってもみなかった。自分で触つてもただくすぐりたいだけなのに。

「くすぐりたいところって、性感帯なんだよ。知らなかった？」

「そ、んなの……し、あ……っ」

知るはずがない。そう言おうとしたのに、また成宮さんの舌がお腹から脇腹にかけて攻めてくる。脇から胸、その先端、そして首筋を丁寧に舌で愛撫し、指はずつと胸に快感を与えてくる。かと思えば、スツと両手を腰骨のあたりまで下げてきて、そこを優しく撫でさすりながら、胸の先端を舌で捏ねまわし、唇を使って吸い上げた。

「ひ、……あん……っ！」

腰骨までも性感帯なの？ それとも、胸と一緒に愛撫されているから？

わたしの足の間は、早く触れてほしいとでもいうように、もうたつぷりと濡れてしまっている。

「その声、ク。る。たまんない」

成宮さんは完全に肉食獣の瞳になって、ペろりと形のいい唇を舐める。それがたまらなく色づばく感じられ、お腹の奥のあたりがまた疼くのがわかった。

やがて腰骨にあった成宮さんの手が、じわじわと太もものほうに下りていく。かと思うと——あつという間に膝に手をかけられ、一息に左右に押し広げられた。

「あ……や、やだ……っ！」

「すごいね。シートまで濡らしちゃって……そんなにここ、可愛がつてほしかった？」

「見ないで……いわない、で……っ」

もう、羞恥心でいっぱい、成宮さんの顔がまともに見られない。

足を閉じようにも、男の人の力にかなうはずなんかなくて。それ以前に、いままでされた愛撫のせいで、ほとんど身体に力が入らない。

両腕を交差させるようにして、顔を覆い隠していると、成宮さんはふつと笑った。

「そんなことしても、可愛いだけなんだけどね？」

そして長い指で、そつと花芽に触れる。

「あ、……っ」

「すぐに濡れちゃうし、一人エッチはしてたのかな？ これだったら初めてでもイけるね」

くるくると花芽を指で擦りながら、まるで独り言のように成宮さんが言う。

そんなこと、口が裂けてもこの男に言えるわけがない。確かに自分で弄つたりすることはあつたけれど、それでこんなに気持ちよくなったことはないし、そもそもイくというのがどういことなのかもわからない。

「ああ、やつぱり少しはしてたのかな。クリトリスちよつと大きめだし。ここ触つたとたん、濡れ方ハンパないし」

「やつ……あ……っ！」

思わず渾身の力をこめてその手を振り払おうとする。だけど成宮さんはそれすらも許さない。

弄^{いじ}っていた花芽の皮をくりつと剥^むいたかと思うと、舌^舌を擦^{こす}りつけるようにして舐^なめ始めたのだ。

「あ、っ……ああん……っ！」

そんな快感、いままで知らなかった。その手の小説で、ヒロインの恋人がそういうことをする場面は読んだことがあるけれど、まさか本当にする人がいるだなんて。それが、こんなにも……腰が砕けそうになるほど気持ちいいだなんて。

「ひ、……あっ！」

「指は入れたことないのかな？ すんなり入るのに、すげえ狭い」

舌で舐めつつ、秘所にくふりと予告なしに指を入れられて、わたしはたまらなくなつた。なんというかこう、下腹部の奥のほうが疼^{うず}いてなにかが欲しくなる、そんな衝動。それは切なさにも似ていて、わたしは思わず成宮さんの腕をつかもうとする。

成宮さんはそんなわたしにおかまいもせず、ただ自分が楽しむかのように愛撫^{あいぶ}を続けていた。

花芽を押し潰^{つぶ}しては舌で小刻みに舐めて、捏^こねまわす。秘所に入れた指を、くちゅくちゅと音を鳴らしながら出し入れする。

そのうち、くつとわたしの中に入れられた指が曲げられたかと思うと、ある一点がたまらないほどの快感を訴えてきた。

「ああっ……、いや……っ！ だめえ……っ！」

わたしは喉をのけぞらせる。

「花純ちゃんのイイとこ、発見」

語尾に音符マークをつけるかのようにご機嫌にそう言うって、成宮さんは指をその形にしたまま挿^さすを速める。それだけでも気持ち良すぎてキツいのに、その上じゅつと花芽を唇で吸い上げられると、瞼^{まぶた}の裏ががちかちかと明滅し始めた。やがて頭の芯までびりびりと強く甘い刺激が走り、頭の中が真っ白になる。

びくびくと足先まで震えがきて、一気に身体の力が抜ける。それを見て取った成宮さんは、満足そうに微笑んだ。

「ん……花純ちゃんの中、いますごくビクビクってなつて締まった。イけたんだね。いい子」

「ん、……ふ……っ……っ」

これが、イくという感覚なんだ。全身が弛緩^{しかん}してしまつて、だるいのに気持ちがいい。ふわふわと雲の上を漂っているみたいだ。呼吸も心臓の鼓動も速くなっているのに、それすらも心地いい。成宮さんは身体をずり上げ、そんなわたしに触れるだけの優しいキスをしてくる。だけど、そうしている間もわたしの中に入った指は、ゆつくりと焦^じらすような動きを続けていた。そうされていくとさつきよりもっと甘い刺激が襲^襲ってきて、どんどん熱も増してくる。

「なる、みやさ……っ」

「んー？」

「も、……っ」

見上げれば、いつの間に脱いでいたのか成宮さんも裸になっている。その肩をつかんで訴えてみるけれど、彼は楽しそうに目を細めて笑うだけ。

成宮さんは三十五歳とは思えないほど身体が引き締まっている。余分な肉なんか、一切ない。女性的な顔に、がっしりと筋肉質で男らしい身体。そのギャップにどきりとしてしまう。

それに、わたしを見下ろす瞳はとても情熱的で色っぽく、その表情もなんだかうれしそうだ。これが成宮さんの夜の顔なんだと思うと、無性にドキドキした。

「指……っ」

抜いてください、と言おうとしたのに、成宮さんはくすつと笑う。

「ああ。指じゃ足りないよね？」

そしてベッドサイドをごそごそと探ってなにか小さなセロファン状の薄っぺらい袋を取り出すと、歯を使ってピリリとその袋を破き、中身を取り出した。そして相変わらず片手の指をわたしの中に出し入れしたまま、半透明のそれを器用に自身のそそり立った肉棒にかぶせる。

そこでわたしはそれが避妊具であることを知ったのだけれど、同時にあることに気づいてごとりと唾を呑み込んだ。

「あの、……」

「ん？」

「その、……男の人のつて、みんなそんなに大きなものなんですか……？」

それは単純にそう思っただけの疑問だったのに、成宮さんはククツと喉の奥で可笑しそうに笑った。

「なんか、俺のは特別大きいみたいだね。だからちよつと痛いかもしれないけど、ごめん」

「え、」

「ていうか、花純ちゃんがさつきから可愛すぎて、俺もう限界。もし手荒にしちゃったら、ごめんね？」

「成宮さ、……っ」

不安になったわたしに、成宮さんは幾度かキスをしながら、そつと指を引き抜く。

喪失感に少し下腹部がヒクヒクと疼いたのは、一瞬だけ。

すぐに指よりももつと大きくて熱くて硬いものが、まるでめり込むかのように入ってくる。わたしは痛いというよりもその質量に驚いて、つかんでいた成宮さんの肩をひつかいてしまった。

けれど成宮さんはそれを咎めるでもなく、わたしの腰をつかみながらゆっくり、ゆっくりと腰を押し進めてくる。少し進んではまた少し戻って、また少し進んで……そのたびにわたしは今成宮さんと繋がるうとしているんだ、と実感する。だけど同時に少しばかり不安も戻ってきて、ぎゅつと目をつむってしまった。

そんなふうになんか動きながら成宮さんは、

「花純ちゃん」

と優しい声で呼びかけてきた。

「大丈夫だから、目を開けて。恐いなら、俺の背中に手を回して。しつかり、しがみついでいて」成宮さんがあまり穏やかにそう言うものだから、そつと目を開けてみた。

彼は優しく微笑んでいた。成宮さんのこんな微笑みは見たことがない。ちよつと驚いたけれど、そのおかげでほんの少し心と身体が緊張がほぐれる。

言われたとおりにおずおずと成宮さんの背中に手を回した。

「顔、こっちに向けて。いっぱいキスしよう」

「は、い……っ……」

あやすように下の入り口のほうだけを軽く揺さぶる成宮さんに、わたしは小さくうなずく。すぐに成宮さんは優しくキスをしてくれて、わたしの唇や舌を丁寧に舐めたり吸ったりしてくれた。そのおかげか、入り口の痛みと違和感が徐々に引いてきて、擦られる熱い感覚にも少しだけ慣れくる。

「ん……なんとかいけそう、かな」

成宮さんが独り言めいたつぶやきを口にしたかと思うと、ぐっと一息にソレを押し込んできた。

「ひ、……あん……っ！」

生理痛に似た鈍痛が、少しあった。だけど、それだけじゃない。じんじんと、痛みともなんともわからない疼きが、わたしの身体の奥のほうから湧いてくる。

成宮さんは、なにもかも見透かしたように、わたしの頭を撫でてくれた。

「花純ちゃんの中、とろとろ。熱くてやわらかくて、狭くて……俺のに絡みついて、ヒクヒクして……ちよーきもちいい。俺の腰まで、溶けちゃいそう」

掠れたその声の色っぽいと感じた瞬間、わたしの中がきゅつと縮まった。そのせいで、そこに入っている成宮さんの大きさを形や硬さ、熱までもがはつきりとわかってしまう。

わたしの中はもうこんなに成宮さんでいっぱいなんだ。そう思うと、切ない反面、ドキドキして

きて、胸までもがきゅんと疼く。

同時にわたしのそこも蠢き、成宮さんが、一瞬切なげに眉根を寄せる。その表情にすら、わたしは見惚れてしまう。男の人って、こんなに色っぽい顔をすることがあるんだ。

「ちよ、花純ちゃん。そんな潤んだ目で見上げられて、締めつけられたら……っ……。それ反則……すげえ煽られる」

「え……？」

「あーもう、だめだ。限界」

「ひゃ、ああ……っ！」

言うが早いか、成宮さんは小刻みに腰を動かし始めた。異物が擦れる感覚に、戸惑いを覚える。成宮さんが中のもを動かすたび、わたしの中が引き攣れるような、そんな感覚。

初めて感じる熱さと硬さに擦られるたびに、わたしまで気分が高揚してくる。

最初の違和感は、成宮さんが指で花芽を撫でるように擦り始めると、不思議なことに快感へとすり替わっていく。そうなるともう、さっきまでであった羞恥心はなくなってしまう、快楽への欲求と興奮も手伝って自然と腰を動かしてしまふ。

「あんっ……！！ あ、あ……っ！」

「花純、ちゃん……っ」

がつがつと、成宮さんの動きがだんだん大胆に、激しくなってくる。

時折成宮さんはなにかを探るように腰をグラインドさせていたけれど、ある瞬間にわたしがひと

きわ大きく声を上げてしがみつくと、そこばかりを攻め始めた。そうすると残っていた痛みや苦しみは全部消えて、激しい快感が腰から頭の芯まで波のように幾度も駆け抜ける。そのたびに勝手に声が上がリ、理性までも飛びそうになる。

「やつ……！ いや、そこだめえっ……！」

「ん……花純ちゃん、そんなこと言つて、……は……っ……ここ攻めたたん俺のをきゆうきゆうに締めつけてるよ……？」

「いやあ……っ！」

熱い昂ぶりだけじゃなくて、言葉でも指でも攻められて、どうにかなってしまいそう。

腰骨と腰骨がぶつかるほどに、成宮さんは激しくわたしを突き上げる。その硬いもので擦られるたびに、わたしは昇りつめていく。

痛いのに、その何倍も気持ちがいいだなんて、わたし……初めてなのに、おかしいのかな。そんな疑問が頭の片隅に浮かんだけれど。

「初めてなのに他のこと考えていられるなんて、花純ちゃん余裕だね？」

「ちが、……ひあんっ！」

浅いところまで抜かれたかと思うと、がつんと音がしそうなほど一息に最奥を穿たれて、身体がピクンと跳ねる。また引き抜かれて、また穿たれて。指で花芽をやわらかく擦られながらそうされるうちに、わたしはあられもない声を上げて成宮さんの背中に爪を立てていた。

「やだ、もう……っ……また、なにか……っきちゃう……っ……っ！」

「いきそうなら……っ、いつてもいいよ……っ」

さつきイッたときよりも、いまの快感のほうがよく大きい。まだ慣れないその感覚が少しだけ恐いのに、成宮さんに何度もキスをされると、そんな恐れもなくなつていった。こんなに優しく激しいキスをされたら、自分が愛されているのだと勘違いしてしまいそうだ。

「ほら、俺に顔見せて……イくつて言いながら、……イつてごらん……っ」

「や、そんな、こと……っ……ああっ！」

そんなこと言えない。

わずかな理性をかき集めてそう言おうとしたのだけれど、突き上げられながら一番感じる花芽を少し強く指で擦られて、そんな言葉は今度こそどこかに飛んで行ってしまった。

「な、るみやさん……っ、わたし、っ……！」

「うん、……っ……なに……？」

「い、く……っ……いつちゃ、う……っ！」

わたしの上で動いていた成宮さんの顔に、またやわらかな微笑みが浮かぶ。と同時に、わたしの中の成宮さんの熱が、また大きく膨らんだような気がした。

「可愛い……花純ちゃん」

「や、あ、っ！」

抉るように腰を何度か動かされ、花芽を擦ったりつまんだりされているうちに、間もなくわたしはまた大きな波に呑み込まれ、さつきのように目の前が真っ白になるのを感じた。またイッたんだ、

と今度ははつきりわかった。

身体を弛緩させるわたしに、成宮さんが再びキスをする。舌先を絡められ吸われながら中を硬く大きなもので擦られると、これも気持ち良すぎて腰がぐくぐくしてしまふ。

成宮さんの腰の動きは、ますます激しくなる。いったばかりのわたしには、その刺激が強すぎて、もう言葉にすらならない。出るのは喘ぎ声ばかりで。

「く、……っ」

やがて成宮さんは、わたしの身体を力強く抱きしめて、ひととき強くがつんと奥を穿った。お腹の中に、薄い膜越しに熱いものがドクドクと吐き出されるのを感じて、なぜだかまた胸がきゅんと締めつけられる。

「だめだって、いまそんな締めつけられたらまた……っ」

成宮さんは苦笑しながら、急いで腰を引いてわたしの中から自身を抜き取る。くったりとなっ
ていると思っていた成宮さんのそれは、避妊具の先のほうに白いものを溜めているにもかかわらず、
まだ大きいままで反り返っている。息を切らせながらもびっくりしてそれを見つめていると、成宮
さんはくすつと笑って唇にキスをくれた。

「俺と花純ちゃんって、身体の相性いいのかも」

「……え……？」

「だって俺、こんなに気持ちいいの初めてだし。花純ちゃんが初めてじゃなかったら、いますぐに
でももう一度突っ込んで、めちゃくちゃに花純ちゃんの中を突き上げたくてたまらないもん」

「……っ」

そんなことを言われると、ものすごく恥ずかしくて顔が熱くなる。成宮さんはふつとやわらかく
微笑んで、わたしの頭をそつと撫でてくれた。

「どう？ 花純ちゃん。気持ちよかった？」

まだ頭が朦朧としていたけれど、わたしは素直にコクンとうなずいた。

ギシ、というベッドのスプリング音で、目が覚めた。

いつの間にか、うとうととしていたらしい。見るとわたしの隣から成宮さんが身体を起こして、
ベッドから降りたところだった。

その均整のとれたしなやかな肢体に思わず見惚れていると、視線に気づいたのか成宮さんがくる
りと振り向く。わたしは慌てて目をそらした。

「花純ちゃん、起きたんだ」

「わたし、どれくらい寝てましたか？」

「三十分くらい。仮眠程度かな。もう少し寝てたら？ なんなら泊まっていてもいいし」

「いえ、わたし両親と一緒に住んでいるので、外泊は無理なんです」

そう言いつつ身体を起こすと、下腹部にわずかな違和感を覚えて、思わず動きを止める。まだ、
中に何かが入っているような感覚がする。

……本当に、しちゃったんだ。

改めて実感すると、なんともいえない感慨が襲ってくる。

「花純ちゃん？」

クローゼットから黒いシンプルなTシャツとジーンズを出して着替え終え、心配そうに声をかけてくる成宮さん。見上げればその整った顔にいまさらながらドキリとしてしまう。

……しちゃったんだ、しかも……こんなカッコいい人と。

これで遊び人でなければ、もつとよかったのに。でも、彼が遊び人でなかったなら、わたしの処女をもらってくれることもなかっただろう。

「身体、平気？」

成宮さんはベッドサイドからリモコンを取り上げ、寝室の電気をつける。ぱつと視界が明るくなった。

「……大丈夫、です」

そろそろと身体を起こして、ベッドの上に散乱した自分の服をかき集める。そしてふと、自分のお尻の下あたりのシャツが赤く染まっていることに気がついて、わたしは硬直した。

「あ、あの」

「ん？」

「ごめんなさい、シャツ……汚しちゃって」

「ああ」

わたしのたどたどしい言葉だけで意味を理解したらしく、成宮さんはくすりと笑う。

「替えがあるから、気にしなくていいよ。それに、俺が花純ちゃんの処女を奪ったんだから、それは俺が汚したようなものだし」

「っ……」

その言い方が妙に恥ずかしくて、耳まで熱くなってしまう。

成宮さんは、通勤用靴かばんと一緒に寝室の入り口あたりに置いてあったコンビニ袋をごそごとやり、なにかを持ってきてわたしに差し出した。

「泊まるんじゃないなら、これ使いなよ」

そういえばこのマンションに来る途中、彼はコンビニに寄ってなにかを買っていたっけ。

受け取ってみると、それは生理用ナプキンと下着。わたしは思わず取り落としそうになった。

「こ、これ成宮さんが買ったんですか？」

「ん？ そうだけど」

恥ずかしく、なかったんだろうか。そう思っちらりと成宮さんの顔を見上げてみても、彼は相変わらずなにを考えているかわからないきれいな微笑みを浮かべているだけだ。

——きっと彼はこんなこと、慣れてるんだ。

わたしの処女をもらうと決めたことで、前もってコンビニで準備をしてくれたに違いない。なんだかわたしのほうが恥ずかしくなってしまう。

「ありがとうございます」

それから成宮さんに寝室から出てもらって、そそくさと身支度を整えた。

その後成宮さんは、わたしを家まで車で送り届けてくれた。

万が一両親に見つかつたらややこしいことになるから送らなくてもいいです、とは言ったのだけれど、成宮さんが譲らなかつたのだ。そういうところを見ると、成宮さんは女の子に対して優しいんだなと思う。女慣れしているとも言うのだろうけど。

助手席で成宮さんを案内しながら帰途に就いたものの、家に着いてもなんとなく両親と顔を合わせるのが気恥ずかしくて夕食もろくに食べられず……シャワーだけはきっちり浴びて、早々に自分の部屋へとひきこもつた。

「はあ……」

ベッドに仰向けに寝転がる。とたんに成宮さんの色っぽい顔が脳裏に浮かんできて、慌ててぎゅっと目を閉じた。

わたしの女としての見た目は、良く言っても中の中くらいだと思う。至って平均的。スタイルも特別いいわけじゃないし、それどころか胸なんて小さいほう。なにお尻は大きくて、そのアンバランスさが昔からコンプレックスだった。背だつて高くはない。

過去に好きな人はいたけれど、男性が苦手な上に相手を好きになつたとたんにまともに話せなくなる性格が災いして、彼氏なんていたこともなかつた。だからこの歳まで、ずっと処女を守つていた。

だけど、もう……わたしは、いままでの自分とは違う。鏡を見たときはぶっちゃけどこも変わつ

ていないとも思つたけれど、とにかくいままでとは違うんだと必死に自分に言い聞かせた。だつてそうしないと、明後日の土曜日に待つているお見合いまで、気をしつかり保つことができない。

落ち着かなきゃ。わたしはもう、身体も年齢も成熟した女なんだから。

そう心の中で念仏のように唱えてはみたものの、心はちつとも静まってくれない。

お見合いということではいままから緊張しているせいもあるし、なによりも、さっきの成宮さんの身体や、ささやかれた言葉が頭にちらついて……結局わたしはその夜、一睡もできなかった。

翌日になつても、まだ下腹部の違和感は抜けなかつた。いつも使わない筋肉を使ったのだろうか、身体のおちこちが少しだけ痛かつたりだるかつたりもしたけど、頑張つて出社する。

成宮さんと顔を合わせたときにはちよつと緊張したものの、彼はいつもどおりの、なんてことのない笑顔と態度だったので拍子抜けしてしまつた。呼び方も当然、「笠間さん」に戻つている。まあ、ここで成宮さんの態度が変わつたりしても、困るのはわたしのほうなのだからありがたいといえはありがたい。

だつて社の誰にも、成宮さんと関係を持つてしまつたことなんて知られたくない。あくまでも成宮さんとは、一夜限りの関係だと決めていたのだから。

だるい腰をさすりながらデスクワークをし、資料室に必要書類を取りに行く。あまり整理のされていない棚の前に、懸命に目的のものを探していると、

「笠間さん」

と落ち着いた低い声音こゝねで呼ばれて振り向いた。
入り口に、同期の小宮士郎こみやしろうさんが立っている。

小宮さんはちよつと癖のある焦げ茶色の髪に、やはり焦げ茶色をした切れ長の瞳。背は成宮さんと同じくらいに高く、成宮さんと並ぶほど周囲の女性に人気もある。歳は、確かわたしと同じだったと思う。

成宮さんは会社でもシャツの喉元のボタンをいくつか外したりして、よけいに軽い雰囲気を感じさせているのだけれど、小宮さんは違う。まるでマネキン人形のように、きつちりとスーツを着こんでいる。これもきつと、真面目な性格の表れだろう。

普段はあまり愛想のない、小宮さん。だけど、たまに笑うととても可愛い。それに彼は、そのクールでストイックそうな見た目からは考えもつかないような、可愛らしいイラストを描いたりもする。そのギャップもまたいいと思う。

そんな小宮さんに、わたしは少し憧れを抱いだいてもいた。ちゃんとした恋愛感情とはまだ言いがたいのだけれど、それでも彼に話しかけられるたび、それが仕事の用事であつてもうれしくて、顔が熱くなつて……ドキドキしていた。いまま胸の鼓動が速くなつてきて、わたしは懸命に平静を装う。

「小宮さんも、資料探しですか？」

「いや、笠間さんがこつちに向かうのが見えたから」

それは、どういう意味だろう。仕事がらみの用事で、追いかけてきてくれたのだろうか。

「すみません、すぐに戻りますから」

「ああ、そうじゃなくて……笠間さん、今日ちよつと身体つらそうだったから手伝おうと思つて。体調は大丈夫か？ 風邪でも引いたか？」

とくん、と心臓が高鳴る。同時に、ゆうべの成宮さんとのことを思い出してしまい、かあつと一気に耳まで熱くなるのを感じた。

「い、いえ、別に……風邪というわけではないので……っ」

しどろもどろにそう言うと、小宮さんはすたすたとわたしの目の前まで歩いてきて、顔を覗き込んでくる。

「顔が赤い。熱でもあるのか？」

そう言つて手を伸ばしてきたので、わたしは慌ててぶんぶんと首を左右に振つた。

「だつ大丈夫です……っ！ あ、あの、資料探さなくちゃいけないので……っ！」

わたしは柵かきに向き直り、資料探しの続きを始める。うっかりすると、成宮さんの甘いささやきや色つぼい表情、身体つきなんかも脳裏によみがえつてきてしまうので、理性を総動員する羽目になった。

幸い小宮さんはそこで引き下がり、代わりにわたしと一緒に資料を探し、たいした量でもないのに業務フロアまでファイルを持ってきてくれた。

フロアに戻ると、つい成宮さんの姿を探してしまった。

彼は社長の荒瀬あらせさんと、なにか話をしてた。成宮さんと社長のツーショットは、よく見られる光景だ。きつと彼は、社長に信頼されているんだろうなと思う。そうでなければ、課長に昇進なん

てしないし。

それに社長は、成宮さんに対しては屈託くつたくのない笑顔を見せたりもする。もともと社長は社員全員にフレンドリーではあるけれど、成宮さんの前だとい意味で言動に遠慮がなくなる。

ふたりを見ていたわたしは、そつとため息をついた。

昨日までは小宮さんの前では彼のことしか考えられないくらいだったのに、いまは成宮さんのことまで気になって仕方がない。それも身体の関係を持ってしまったからだろうか。

いや、きつと違う。小宮さんがわたしの体調の話をして、それで成宮さんのことを連想してしまったからいっぱいいっぱい……

これでは小宮さんと成宮さんのどちらにドキドキしているのか、わからない。

それもきつと下腹部の違和感がそうさせているんだ。

わたしは自分にそう言い聞かせ、それからひたすらパソコンに向かい続けた。

そしてそのまた翌日、土曜日のこと。わたしは着慣れないレンタルの着物を着せられた。着慣れないどころか、成人式以来だと思う。

「六道さん、とてもかっこいいのよ。花純も写真くらい見ればよかったのに。ああ、早くいらっしやらないかしらねえ」

付き添いをするお母さんは、完全に舞い上がっている様子。

相手方が手配してくれたという、この高級料亭の個室も緊張あせを煽おほってくるようで、はつきり言っ

て居心地が悪い。相手の写真は見る気もしなかったけれど、名前だけは両親に無理矢理覚えさせられた。

六道未希。

奇しくもおととわたしの処女をもらってくれた、成宮さんと同じ名前。

成宮さんといえば、昨日会社で顔を合わせたときのことを思い出す。

態度も呼び方も、普段どおりだった成宮さん。わたしは小宮さんの前で彼とのかを思い出して、あんなにドキドキしていたのに……成宮さんにとっては一夜限りの関係なんて、当たり前のことなんだ。そう思うと、なぜだかちよつとだけ、淋しかった。

「お待たせしてしまいました申し訳ありません」

入り口のほうから男性の声がして、じつと下を向いていたわたしはびくりと身体を震わせた。

いよいよお見合いが、始まるんだ。

「いえ、わたしたちが早めに来ただけのことなので、お気になさらないでください。……ほら花純、いつまで下を向いてるの。六道さんに、ご挨拶なさい」

お母さんは相手方の付き添いの男性にこやかに応対してから、わたしを肘で小突く。わたしはそろそろと顔を上げて、正面に座ったお見合い相手を見た。

瞬間、ドクンと心臓が鳴り、これでもかというくらいに目を見開いてしまう。

「こんにちは、花純ちゃん」

だって、そこにスーツ姿でにこにこ座っていたのは、紛れもない、成宮さんその人だったから。

「な、……どうして成宮さんが……」

けれど成宮さんは驚くわたしにかまわず、にこやかに続ける。

「お義母さんには伝えておいたんだよね。きみとは同じ会社の上司と部下の関係で、おとといからプライベートなおつき合いもさせていたでいてるんですって」

「なっ……」

なにを言い出すんだ、この人はっ！

しかもわたしのお母さんのことを既に「お義母さん」呼びだとか……っ！

わたしは言葉を失ったまま、金魚のように口をばくばくとさせて成宮さんを見つめるだけ。

「詳しいことを話してなくてごめんね？ おととい、お見合いのことを正直に話そうと思ったけど、

花純ちゃんそれどころじゃなかったから」

成宮さんがそう付け足すと、隣の初老の男性がたしなめるように言う。

「それならやはりいま言うべきだな。お母さまのほうにはお話は通しているはずだが、未希と結婚するのは花純さんだ。花嫁がなにも知らないままというのも、酷だろう」

「そうですね」

成宮さんは、顎を引いてうなずく。

「なにも知らないままって……？」

隣を見ても、お母さんはにこにこ成宮さんと付き添いの男性に向けて愛想笑いを浮かべているだけ。

確かにいまのわたしは、まったくなにも知らない状態なのだけれど。どうして成宮さんがここにいてわたしとお見合いなんてしているのかも、どうして彼が会社で苗字を偽っていたのかもわからない。

そこで付き添いの男性が、スーツの内ポケットから名刺を取り出してわたしに差し出した。

「申し遅れました、花純さん。私はK県の県知事しております、六道良一と申します。未希の実の父です」

名刺を受け取ったわたしは、またまた固まってしまった。六道良一って……あの六道良一!? いくら世情に疎いわたしでも、その名前なら知っている。考えてみれば六道なんてかなり珍しい苗字だから、いままで気づかなかったほうがおかしいのかもしれない。お見合いのことで頭がいっぱいで、六道は六道でもまさかK県の県知事と関わりのある「六道」だと思いつらなかつたのは確かなのだけれど。

六道良一といえば、彼がいま自己紹介したようにK県の県知事をしていて、お家は代々政治家の家系。元をたどれば由緒正しい伯爵家という家柄らしい。加えてその魅力的なロマンスグレーと紳士的な物腰もあって、女性誌が頻繁に騒ぎ立てているのだ。

そういえば、突然登場した成宮さんばかりに気がいついていたけれど、六道さん、確かにテレビや雑誌で見たことがある。

「まあ実の父といっても、父さんは俺が小さいころに離婚してて、俺は母さんのほうに引き取られたから、苗字が違うんだよ」

成宮さんの説明に、なるほど、と思う。いや、それでも謎が残る。

「それならどうしていまのままのお名前でお見合いしなかったんですか？」

「だって、まんま俺の本名でお見合いしたら、花純ちゃんに警戒されると思ったから。俺の見合い写真も花純ちゃんには別の男の写真を見せるように、ご両親に頼んでおいたくらいだし」

「へっ？」

思いもかけない理由に、わたしは目を丸くする。

「とはいえ、花純はお見合い写真を見ようともしませんでしたわ」

ほほほ、とどこぞのお嬢様のような、似合わない笑い声を上げるお母さん。

なんてことだろう。なんにも知らなかったのは、わたしだけだったなんて。

確かにわたしは、お見合い相手が成宮さんだとわかっていたら、いまよりもっと警戒していたかもしれない。もしかしたらお見合い自体断ってしまったかも。

だって彼は、遊び人だし。一夜の相手には最適でも、結婚相手としては不適合だ。

わたしがいつも成宮さんに対して感じていたことを、彼は敏感に察していたのだろう。仕事ができることは知っていたけれど、勘までいいなんて……どこまでも食えない。

「だけど、どうしてわたしのお見合いなんて仕組んだんですか？ 成宮さんだったら、他にもたくさんいい人がいたと思うんですけど」

それが、一番の疑問だ。すると六道さんが、口を挟んできた。

「六道家はいくつか会社経営もしていますね。そのひとつを未希に任せたいとずっと前から言っ

ていたんですが、こいつは全然首を縦に振らなくて。それなら六道の跡継ぎを作ってもらおうということで譲歩したんですよ」

「跡継ぎ……？」

「ええ。六道はそういうことにうるさい家系です。しかも本家の男子は未希しかいない。会社経営をしないなら、せめていつまでも遊んでいないで、結婚して跡継ぎを作れと言ったんです。それで何人か見合い相手も見繕みくづったんですが、こいつが『笠間花純以外の女性とは結婚しない』と言い出しまして……突然の話に私も驚きましたが、大事なのは未希の気持ちですからね。こいつの気が変わらないうちにと思って花純さんのお父上と連絡を取りました。幸い私の大学時代の同級生でしたからね。そしたらちよūd、花純さんも結婚する気配がないというのがご両親の悩みのお聞きまして」

「俺がただ普通に結婚を前提につき合ってくれなんて言っただって、花純ちゃんは絶対断ると思ったしね。だから、こんなお見合いを仕組んだんだよ」

成宮さんが、そうしめくくる。

成宮さんが実はそんなにいい家柄のお坊ちゃんだったなんて驚きだけれど、わたしにはもっと重要なことがあるわけ。

「いや、でもあの……どうしてそれがわたしなのかを聞いてるんですけど」

「そんなことどうでもいいでしょ花純！ 顔もよくて背も高くて家柄もしっかりしていて、お金も本来なら働かなくてもいいくらいにあつて。こんないい人、一生かかってもあなたには見つけれ

ないわよ。細かいことにこだわってないで、さっさと婚姻届に記入しなさい」

わたしの言葉を遮るようにしてお母さんが言う。あの、いまなんだかとても不穏な単語が聞こえた気がするんですが。

「婚姻届って……?」

恐る恐る尋ねると、

「用意してきました」

と六道さんが、持っていた鞆から大きな茶封筒を取り出す。そして中から一枚の紙を取り出して、わたしの目の前に置いた。そこには確かに婚姻届と書かれてあって、しかも相手の欄はすべて記入済みで。

「え、ちょ……まさか、今日入籍するとかじゃないですよね!」

焦るわたしに、成宮さんはにっこりと微笑む。

「この前も言ったけど、善は急げって言うでしょ? 結婚式もあとでちゃんとやるけど、まずは入籍だけでもしておかないとね」

「今日お見合いしたばかりなのに!」

「元々結婚は決まっていたお見合いなんだから、いいじゃない花純」

お母さんが上機嫌に言えば、

「跡継ぎも早く産んでほしいですしな」

と六道さんも、上品な笑みを浮かべながらうなづく。

というか六道さん、物腰が上品なわりに言っていることがかなり過激な気がするんですが??

「花純ちゃん、ちょっといいかな」

ひとりだけ状況についていけずあたふたしていたわたしに、成宮さんが呼びかけてきた。彼は六道さんとお母さんに「少し、ふたりに話したので少々待っていていただけますか」と言い置くと、席を立ってわたしの手を取る。

「ちょ、ちょっと成宮さん……!」

「いいから、おいで」

そしてそのまま無理矢理、個室の外まで連れ出した。

成宮さんはさっと視線を走らせる。いまのところ、廊下に人気はない。彼はわたしの手を握ったまま酷薄な笑みを浮かべ、ゆっくりと見下ろしてきた。

「花純ちゃん。婚姻届、さっさと記入してくれないと……おとこの夜に花純ちゃんの声を録音したものを……匿名で社内に流すよ?」

「っ!」

わたしはまたも、啞然。

おとこの夜に録音したもので……まさか成宮さん、わたしを抱いているときずっとわたしの声を録音してたってということ!?

目を見開くわたしの耳元で、成宮さんはどこか楽しそうに甘い低音ボイスでささやきかけてくる。「いく、イツチャウって……可愛く啼いてたよね? あれ……俺としてもできれば俺の心の中だけ

にとどめておきたいんだけどなあ。花純ちゃんが言うことを聞いてくれないのなら、仕方ないよねえ」

わたしのあんな声が社内に流されてしまったら、いままで築き上げてきたものが全部なくなってしまう。ゾクリと背筋が震えた。

やっぱり、わたしの勘は当たっていた。この男、やばい奴だった。とんでもない腹黒だ。あの夜以来成宮さんって優しい一面もあるんだと思っていたけれど、間違いだった。

「……成宮さんって、遊び人ってだけじゃなくて最低腹黒男だったんですね」

せめてもの抵抗に涙目で睨みつけても、成宮さんは、

「褒めてくれてありがとう」

と、にこにこしているだけで。

そしてその日わたしは泣く泣く、婚姻届にサインをしたのだった。どうしてわたしのことを結婚相手として選んだのかは、やっぱりまだわからないままに。

2 翻弄される心

婚姻届は成宮さんによって、その日のうちに市役所に届けられたらしい。

この結婚は本当に用意周到に計画されていたようで、個室に戻ったとたん結婚指輪の交換までさせられた。

もちろん、結婚指輪は成宮さんが用意したもの。成宮さんの指に合うのは当たり前だけれど、わたしの指にまでびつたりだったのは、おおかたお母さんを使って事前にサイズを調べておいたんだろう。

いま思えば、わたしの処女をもらってくれたあの夜、成宮さんはわたしが実家住まいだということも知らなかったふりをしていただと思う。あくまでも、お見合いまでの間、わたしを警戒させないために。本当に、なんて男なんだろう。

そしてその翌日の日曜日、わたしは少ない荷物とともに、いまだ歓喜している両親に見送られて彼のマンションへと引越し、そこで彼と同居することを余儀なくされた。改めて考えると、成宮さんがこの永住型マンションに引越しを決めたのも、わたしと結婚するためだったのかと理解できる。

結婚式はまだ先だけれど、先にお盆休みに新婚旅行のつもりでどこかに行ってきたらどうかと